

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

11+

全卷五曲亭主人編
六六

鶯聲見大傳第九輯

丁亥下
中華書局印行

卷之三十二

皇清詩選

丁亥平吳校



南國見八太傳第九輯卷之十九簡端鬼說贊
寫よ友人。生ちてゆくべく或え本傳第十九回素齋鬼語を以て終
百四十九回一休画虎を庶ど。事々物を怪談鬼語をゆる爲
且よ十二地蔵の利益を下す薬師十二神の靈異あり又前より狸鬼の怪談あり。
後より画虎の怪談あり其事御て重複を免れ互に相犯を以て大凡者
官より怪談を好むと申す。其怪談を好む者必飽く心地をへらう。而も
當なりと同作より答へ。否否然して唐山大士の智慧が深き也
役鬼話怪談の是れ獨西遊記のとくも歎言が本傳の如く又
是怪談を更に懸念て建て見る。始より石碑一百六箇。齋言て走馬の如く。然る
石碑一百八箇の廢巣居て沿溪へ遂よ宋朝の忠貞士の做り。彼等の大趣
向ふて作者は隠れへてゆく。和子木詩院藏在明詩子よ
一編より今春覺醒也。



説かく。兵師の話説十八回。百三十一回のまち。
第百三十回のまち。百四十九回のまち。
守咲翁又一と見ゆ。本傳の京師事を説く。十回は是物うちの次回も。
尋。安靜とて。思ふ。故よもゆ。そを何とすが。八大士。俱々
勤労よ到。里見の家發見よきのてかく。大江親兵衛と外七大夫
答。一介の功と。是。八位素食。食のへよる。へ。大士。かく。直
京師の話説。智つせば。俗云。田舎芝居。似て。始より説く所。東八分の事あ
蜀心も無て。記譲。處う。大喜の物の本。和尾。所め。壁。水滸傳の
八十回の後。おみの事及京師の話説。よ。ままで。一百八箇の魔君
皆。ままで。おみの事及京師の話説。よ。ままで。一百八箇の魔君
梁山泊。嘯。強の。何を。う。勧。徳。を。是。よ。て。これを。觀る。本傳百二十回の羅
賀中。二等。又被金端。七十回。事を説く。水滸傳の。五十七回。

か。のまことひへり。一
かたの水舟船ト内を走れ。此骨體をゆる者無く有人の脛筋。本傳百
五十四回。國圓ニ其宣。かむとひと又役金瑞。水滸七十回を強て結
局もと日を同、あて諭。じて、吾志。三司桑榆の首目。是す。至るセ
有官ふて本傳。結局。つい。故。をあひ。予も。まぶす。か。慶福尚
餘。ある。せよ。追。格。へ。を。か。ら。め。九。解。下。姓。の。王。七。十。卷。今。四。五。研。す。
御大國圓。至。都。う。○筆。次。よ。本。轉。卷。二。十九。第。百。四。十七。回。大江
仁。三。度。を。破。久。の。山。像。み。画。工。謬。作者。新。本。よ。違。へ。仁。ぐ。馬。上。の。事。
難。兵。そ。研。と。提。と。擣。と。爲。体。と。画。だ。う。第。百。二。十七。回。左。右。の。出。像。
仁。が。跪。と。醒。と。敵。の。舉。と。根。ね。根。ね。良。此。彼。重。復。そ。且。馬。上。の。人。年。れ
た。相。應。は。い。都。官。心。難。き。も。ゆ。○又。云。画。真。と。字。新。改。大。江。吉。天。之。大。江。吉。天。

天保十一年元月廿八

卷之三

卷二十九	卷三十	卷三十一	卷三十二
第百四十四回	第一百四五回	第一百四十六回	第一百四十七回
白河山代四郎 談講各親兵宿船大鬼	紀二六月下 親兵獨溯上破三門	頭船之悔執權送遠 奸詐之悔執權送遠	東山銀勝老和尚 石壁茶所堂賢少年 辯朝少賞
八犬傳第十九回 下卷之三 日錄	八犬傳第十九回 下卷之三 日錄	八犬傳第十九回 下卷之三 日錄	八犬傳第十九回 下卷之三 日錄
第百五十五回 續一 第百五十六回 續二	第百五十七回 續三	第百五十八回 續四	第百五十九回 續五





醉頃



歲次己卯年十一月十四日
立

南德里見八大傳第九輯卷之二十九

東都曲亭主人編次

説谷を義利翁大島を身
御說燒雪行四郎の直塙紀二と商量ふ果も本日未開左側ニ則ナリ
御行若高取御社の御先本の方へとてひを立モ申 聞りは豈立時又白郎の紀二六を説
ア傳麻衣那白河を昌舉虎の道ハケの鍛砲も及びテヒヌル我ノ耶里ニ達
モ何をアトヨモ防ぐや是裏ニ酒家ハ大江腹と人迹無き富山の洞ニ六卷の先唐と等
キ。而ぞ此名虎の害多アハ伏羅神の擁護も存レ今わが我媚神の眞助也。居
まう。モ。を
幸ひアホんと思ふ。ハセモ車内筋御也。ひを起ニハモ、さす
御行。余の御神の祐を空。漏す。一。モ。其存。モ。ハ。以。う。ソ。モ。那虎を。

四
四
四

我們對酒樂を口上を議る。之れよりは、拵備で勢ひ見る、甚矣の準備
也。這議に什麼と相謂ふ。六條町領へ道府、兵馬、馬車候りて、
所遣の機の持宣を六條うちと列卒遣て、舊大林と謂ふ。是來かと詎言道く。吟咤
錢を廻して市々通す。其後通旅里人を召す代の事が、御宿が東ん大江原。
此の鳥で、遠地の御用果され、身の暇をもつて、明日へ歸路は赴く。是より我等、這
日育え。那屋へよぎりて、主の伴を立ねば既り、鞍馬皮を賣り、夕饅の本と腰
餉を人別み準備せよ。あくまで舊事と宣言する、其年頃を且月。月屬のいへど、
還しをきる程、紀二十六集五條宮。客店を離り去て、而立て又歩へど、邊
きゆ出で、四百步。左の山中程、下申す。一時候那西二周の界、兵門の東、西皆
買合す。女房主は、併ち饅頭、果て。各準備の腰餉を受合する。小紀
ト、うつと。手のこゑの、よりともえ。右のこゑの、よりともえ。右のこゑの、よりともえ。
十六分足らずを。と、思ひても、店十二八、伴客の、空氣を知らる起

本をかえず尚ほ盒子の方に金より畠下代四郎へ五郎の駿兵に向ひて里裏より
舟橋へ遠慮あらず。紀二たを惜地より留め別店にて在す。支の顛末を見
豈れど黒兵仰ハ肇て骨観得。且感一旦歎びて之處へ思ひて人程ヨ直塚紀二
木を引葉初め和や肱甲脛筋と身を擇め西刀と腰うて腰の跡肩うち見れ。代四郎云
妻翁の體身樂して坐て在す。川風寒に黒燭時候代四郎仰ハ逆旅主人よ告め
ま。両個の馬とふと兩箇の甲冑腰を令シテ各足を斃ひ又両個の駿兵は甚大
材と聲と盒子と被子と裏表て野よりよ代四郎と首をくく。捍棒と合ひ
き。紀二六。親兵衛の鎧と合ひて肩うつ又只一個の駿兵無行裏表て捲田馬
を。猶子の父と妻と背輕いと笑ひて往而達。人を惜地と三條と大通
も度。河原の守屋を外す見へ続う。白河の山路を登りて宿百二十里。そ
過ぎる。是れ大家由新セモ。或時政を相手て表親兵等。因も思て不知

宿

安東門の太山窓而も野子玉の鳥文あれ。又は樹枝は溶けた水で研磨して
 嵌をとく積れ。石の障子もあても路を走る。りゆひ。憶。寺の深て。
 月が昇る。今朝も丑二時未だと。思ふ。時候鉢や年を賣る。古麿ち十町許。遠方
 き。敗堂の頭か。本。先に立ま。一個の。黒衣が。手渡す。吐嗟と叫へば代四郎。起
 て。自餘。禪。なま。什麼。齋。先蕉丈と抗て四下を見る。鮮血。許。流捨
 ぐ。地圖の。足。脚。前。小。兩。個。の。僧。あり。一個。れ。あの。瓶。を。毒。じ。酒
 集。脚。を。衝。殺。良。生活。和。わ。付。す。且。其。鮮。血。を。印。し。る。獸。の。足。迹。を。見。る。
 三四百。原。東。遠。僧。等。ハ。那。裏。鬼。嘸。作。急。失。察。宿。て。又。齋。イ。ナ。中。代。四。月。と。
 六。又。火。と。抗。て。遠。僧。を。熟。と。打。相。ま。る。こ。そ。那。左。右。川。の。上。ア。説。存。德。用。ハ。堅。剣
 月。ハ。奇。う。僧。ハ。死。彈。て。噴。無。斬。や。遠。趣。僧。等。天。訓。傳。を。存。多。罵。り。僧。未。有。
 ま。と。そ。嘸。等。這。僧。等。ハ。此。地。を。と。起。破。戒。の。度。詔。を。生。れ。ハ。次。朱。香。草。す。の。彼。等。て。酒。

昌。よ。徳。用。ハ。堅。剣。リ。不。賣。ラ。シ。天。本。を。呼。吸。い。る。休。む。衝。放。ク。ミ
 除。き。我。指。と。他。社。之。そ。校。程。ハ。代。四。郎。ハ。遠。く。紀。二。六。七。見。え。モ。各。三。三。參。合
 ふ。一。番。時。這。里。す。鎮。ん。と。分。打。き。僧。の。そ。集。脚。を。踏。集。す。脚。降。各。看
 痘。二。三。代。這。堂。内。最。禪。弱。る。一。個。の。妻。あ。り。口。ふ。布。巴。裏。暴。衝。れ。て。兩。手。皆。若
 肉。不。み。が。氣。強。や。免。頭。暴。暴。て。傳。言。僵。の。自。身。を。代。四。郎。是。一。禪。弱。病
 痘。二。三。代。這。里。す。紀。二。六。七。代。四。郎。と。其。大。家。怪。し。と。來。る。蕉。丈。振。拂。ら。爲。一。禪
 内。よ。も。と。一。人。覺。め。禪。人。を。禪。人。を。禪。起。至。金。俱。ニ。不。る。這。里。年。歲。二。八。計。
 素。く。ま。た。美。人。富。重。豪。長。く。聲。香。ア。ク。其。衣。服。の。物。京。様。ト。朴。實。古。風。
 市。井。九。寶。寛。成。時。院。二。代。四。郎。て。だ。す。て。使。り。何。う。相。の。け。ん。小。守。下。
 駕。く。と。久。支。え。ま。の。美。食。少。ふ。雪。次。經。と。喰。れ。多。日。足。全。古。川。廢。駒。の。豪。腹。

脈陰

脈陰

其とて。布引
織巻を。紹興
の事也。

皆すらと那班よきと相應僧が爲縉介あり。近松元へおで來ぬ時那日森虎は撞
見て事のゆき及ばず。とて少代四郎頭を金とく先這妙と囁活て。其の上
在大家呼ひねと同音。則右うち左より官は喚渡る度に絶全自身を語
てもゆえざれば大家竟よ聲と吐ひまつせきとうち諱ふ。代四郎頭を便け。等を又
兄弟の大江和子の別々臨了事ある時の段。よし命ちく。嗚呼。頬け。地神
根。祥葉さよ。禁り定集。源りゆよ。一番の其元を回して。心活。音をへる。是
れ仙丹。すくい。とめひそむ。育す。吊る。茱萸を。上邊く。飴を。下流。
少許。金口。かわら。の口。中。程。紀。二。六。を。走。壁。石。御。て。揃。べ。共。宿。は。亦。其。只。
伏。ぐ。花。て。胸。て。脣。聲。て。入。す。亦。復。喧。聲。と。耳。暗。許。左。右。よ。屋。よ。件。の。妙。服。坐。全。身。
因。復。う。最も。如。心。然。と。眼。と。角。息。を。吻。衆。人。を。左。見。右。見。と。什麼。付。等。
行人。と。咸。代。四。郎。朱。蓋。心。歸。以。我。们。八。是。列。入。重。を。安。房。の。里。見。の。被。正。

とひつてし。ひくの車ひよんともとゆうの車。御の轍を走る。施入へ神
玉が教る。汝御をとて回詔に听く。御の慰。原来推量一差。すなま
御座せよ。可いれ兵數をねど。悉示。扶雪子代の節。深保又是を。直傍
紀二十六甲乙其の七名は過り。皆是大江親兵衛。従ふ。安房の相川
御の伴若田也。も月来三條。別店みひ。今日も大江親兵衛。相公
馬鹿。是も。日奈虎を對治の與。白河の太山。亦猿
胡を。若ねは。も。猿の御の伴を心入れて。やがて。之を。と云其名
あら。主の先達を外す。他所。よろこび。かねば。走る。七名にて
山。攀。登す。情地。玉。主。と。まわ。し。夜の山路。よし。か。内。ま。心。重。珠。ま
體。す。又。遠。里。ま。那。裏。宿。ま。具。と。傷。れ。て。仆。手。と。見。つ。又。充。身。喫。吸
氣。す。と。見。る。ま。神。茶。の。喜。致。あ。け。御。既。告。ま。し。如。麻。

そぞら。かきのひなえちをへる。
やがては、東人犬江親兵。月朱林。宣寧寺。愛磨。御田。あらだ。
故主を命と。准り。是暴虎對治の怒命。嘗めり。飲む。我們も亦懷を。船上の危難。
奉まねど。ひまの與。面を起。侵草とひく。ひそかに。辱す。而やう。常め。
脚ばく。思良ぬと。町寧。の。脣。而。身。起。退。又。紀。二。空。設。よ。ア。レ。レ。レ。レ。レ。
ま。奉。よ。和。局。ハ。那。里。三。陣。れ。バ。酒。家。釋。兵。二。名。セ。以。而。西。陣。の。術。館。ハ。適。ん。就。て。加。せ。
行。鹿。醜。ん。じ。も。も。も。も。も。も。敵。久。日。屬。和。子。と。謙。る。奸。邪。毒。惡。の。顛。夫。
を。と。と。吐。出。え。ん。れ。が。羊。死。羊。生。か。の。又。び。よ。す。き。那。道。指。ふ。死。名。や。絕。人。是。も。亦。微。へ。一。
と。ひ。じ。や。ニ。よ。び。脅。と。掠。て。又。ま。わ。都。ま。拿。戴。す。這。神。茶。と。邪。奴。外。賣。え。ハ。最。作。矣。
あ。と。の。と。お。ん。喰。え。今。又。食。て。正。用。る。も。宜。一。も。を。食。て。も。う。し。色。の。説。す。遮。限。
ま。高。麗。を。犯。夷。を。ま。と。又。食。く。教。誨。寔。是。二。名。二。極。い。
か。か。ま。わ。え。び。よ。し。國。と。舊。大。と。乘。莫。之。歸。し。が。だ。ゆ。て。う。差。代。四。し。の。も。至。と。上。

五
落合へて人を殺すん
事は可とも軍兵へて名を留め追んと鋒を失ひ六推禁を升りあわてて逃げ
侍れど那見のへ重卒十人とすを徳用の鷹鹿城も及壁門が衝きる。是處より破一挺
走てやれり他をも詫うかにとあらはよ甲斐又く虎の氣れより非如今更か何
羅兵を留四道をとひ大は主あるゆき達をマ反て虎の權見ひ誰。馬蹄の卷を
もく那駆曾益するや只命運を自然よ往て始且。遠里重慶寺が多
特の事。今の大事ハ船上より身を思へる人を思ふ。尚又途非當の事。事と云ふ
鄙語云々僅作て魂を入れると。丁寧勞て功を乞ひて。主へて自伏をゆく後物
をも及んや。柱子二人を復し。もひねと連り。事あり已。充代四郎竟は達成て
爲す。事又他幸と達を。畢竟仰ひて汝等日今才すが。事と云ふ事。主へて至るが。事
と云ふ事。主へて至るが。事と云ふ事。主へて至るが。事と云ふ事。主へて至るが。事

西へ御作はれに轎子の進むを。まことに領後三日若様不駕定
の御館へ遅一車んと。ひままで雪の駕籠にて。思ひ立たぬ波打の母情ふ再書
書ふゆのよき夜の山路を厭はむと。遙を御へ遙くもめは是と稀なる心操
狼窟あり。せうの主の暴那大江と。が忠信義重の崖際八人の嘆へ。御
开く花臺也。せうえい義体也。下を覗むと。半更思合もあり。是と就す憎む。那
德相と。他物の鑑み。縁より。主事は是因顧の者ア。毛い。清白持。首僧
多と。思ひ。御。御。今宵の酒禪破戒は。繫の業數。觀面。愚癡虎。寢。よ。時
喪ひ。現天罰。毛い。も。館。里。の顛末と。うえ。在。か。御。毛
ぬ。よ。黒六日の少太は。ゆ。も。先。の。と。ち。う。て。と。父。母。を。代。四。郎。い。父。の。累。を。眼。歸。す。
否。寄。東。下。司。ど。か。と。御。毛。見。し。義。を。思。ふ。教。を。守。る。本。體。毛。脚。當。御。毛。
つ。じ。の。御。東。親。



つと幕の宿の兩個の黒兵を遣
てゆきり奉手を般若寺へ
勝着也。吊緋天無極へて挥棒二條を今更に是を御代とて鞭昇寫入
一個の黒兵を薦女二三把に於て令をまち背をまくる其一把は火を燃えよ。左より挥棒と
突進にて外より立ちて腰を待て在り當下代四郎と元一をた雪吹姫を杖駕にて敢て直すを
モ。兩個の黒兵あれぞ見そ。近殿壹の腰頬を指下へ而西肩入れ待て仰ひるく
程に一個の黒兵を薦女大を振黒ふを見ゆ。代田郎の挥棒を突鳴り引添て
西面で移てあくせけり奈霜よ未ニ六対達立。兩個の黒兵と腰を雪吹姫
東を故外子退く時肚裏を罵りや。號呼り更の腰を垂れ。今近神苑すのう。應和月
取上刑と連坐とも明か地より發がを苦て在り。作と云。這勢ひく事の実と近山見出づてえ。
太尋思をもつて黒て黒兵は同様をと車情と其を示甚が兩個の黒兵をもつて倒れ
と解。又ある挿起ちが紀二十六日茶能を申す。即上ア。ある挿起ちが紀二十六日茶能を申す。

死す者多きを。度て寢る者多きを。何れかの者も。トテモ思ひは
ねと實思候す。而して徳用所々。黒頭の。開り各大義心。御親の事。甚しきれ
あらゆる事と。向て紀元ハ終る。と。我仰。公事。追縁。あらゆる香高大介。食事。
徳用。うが猛す。亡命。路費。うの不便。若の情地。赴墓。他。之。

此の金を。過與。其後方へ送。由サ。かう未だ又。情地。と。我。暮不無。一
時。宣の。我が。必。者。們。執。宣。と。軍。職。役。を。授。ん。事。と。仰。され。甲。非。文。ア。集。事。
飲。會。あ。わ。泉。出。り。那。虎。か。次。手。を。喫。れ。脚。を。断。れ。投。そ。へ。ど。も。も。天。明。を。見。
憲。ニ。せ。見。真。の。追。縁。の。這。頭。へ。未。か。年。何。ハ。也。寔。不。便。の。う。う。と。那。虎。
ま。其。前。し。大。假。ア。徳。用。を。そ。く。長。老。よ。遠。は。は。我。们。の。事。の。事。
傳。と。さ。ま。す。那。小。姐。の。妻。の。う。う。今。り。那。虎。那。里。居。や。小。許。万。き。ア。子。を。
ア。徳。用。楚。と。心。で。嘲。人。を。徳。用。と。我。道。堂。内。と。一。個。の。物。を。捉。電。と。措。な。所。

手。本。か。を。と。其。頭。を。あ。其。魔。を。と。手。か。の。人。か。無。無。
手。向。那。廟。其。頭。を。あ。其。魔。を。と。手。か。の。人。か。無。無。
と。の。兩。個。の。惡。信。ハ。共。得。歎。口。氣。入。て。嘆。最。惜。シ。那。小。姐。も。亦。屋。虎。の。神。主。
し。祭。今。れ。尿。中。身。出。し。障。む。へ。と。勤。事。一。く。黙。意。有。結。且。一。往。行。
紀。二。六。を。見。え。す。と。嘲。人。を。左。手。右。手。我。虎。命。を。奪。の。殺。取。て。今。更。よ。か。を。
手。和。草。内。あ。傳。か。へ。ひ。其。屋。略。を。告。聞。ね。と。我。ハ。那。里。見。使。者。を。
傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。傳。事。
河。原。の。勤。役。の。頭。人。を。種。子。嶋。中。正。告。絕。内。鬼。平。五。景。紀。鞍。馬。海。傳。賢。久。文。
廟。經。掌。算。全。宵。懈。地。謀。一。合。之。傳。子。這。山。路。の。僧。今。只。那。大。江。小。雅。子。承。
思。人の。間。に。繫。果。と。我。ハ。三。徒。祭。堅。刑。を。篤。七。連。東。へ。走。ら。と。逆。恩。心。か。が。
言。見。え。す。と。手。の。健。を。整。理。ひ。植。み。萬。す。走。ア。流。て。遠。里。す。ち。一。年。時。

魏主在程免家吏。魏五虎の勇士们。一見す。而皆震栗。是日
撞見一叟。首挂准噶。大銃。载六十石。木鎗杖。也。並擊之。甲靴
堅。骨柔。被。情。其。俱。足。脚。安。断。化。氣。絕。焉。余。髮。ハ。死。も。あ。す。在。子
立。原。栗。俄。意。中。人。の。虎。子。街。走。凡。然。然。上。の。小。胆。暗。暗。暗。
猶。恐。上。の。再。意。我。们。を。肩。引。被。早。來。奉。赴。今。情。地。那。里。客。戶。
之。之。道。而。立。か。う。義。親。約。是。等。の。和。事。を。人。情。之。報。生。か。路。晉。
寧。魏。之。金。子。之。計。う。知。取。ど。如。繫。之。被。官。署。く。ま。し。事。公。子。之。知。母。之。取。
懸。却。と。諸。求。之。六。堅。刑。共。信。之。當。合。て。样。若。像。紀。ニ。六。子。之。向。之。品。
ミ。た。ウ。つ。い。ま。お。上。
方。達。今。師。父。之。兄。之。追。隊。皆。以。既。五。具。將。弓。之。鎧。
森。森。今。欲。之。力。而。更。之。元。之。恩。京。師。之。羣。兵。矣。之。統。領。之。數。多。
何。益。之。猶。休。氣。而。之。我。之。日本。之。運。之。ア。バ。且。之。之。花。之。金。不。之。和。主。之。懷。之。魯。

れももう少し。然へ亦若翁の今更一籌時令を惜し。而も事はナニが爲る。又神事の音聲を
聞く。さうしたてども身を免れ。謂意。眞の性を告む。徳用。範香。西の。事。
其ノ。若翁。無の。謀。也。那五個。猛者。を帮助。う。大江主。を害せ。と。聲。
うちや。品。多。そ。多。又。之。元。元。ど。と。あ。か。わ。ふ。か。れ。ま。と。是。
う。そ。口。走。す。雨。上。下。雨。返。是。天。罰。の。致。と。所。徳。す。思。合。せ。若。我。日。詔。之。
て。う。き。ひ。の。も。い。と。
有。山。の。根。す。山。嶺。の。洋。后。田。う。一。ク。能。元。の。敗。先。よ。發。一。時。既。よ。若。翁。を。詔。

萬
可^ハ面^を對^ひて、身^のひとあも^を奉^はりて、久視^{され}ば若^いて、
が^ト國^{めく}へ^まふ^る堪^えて、自^由に^まる哉^{。嘗^{めし}て}
兵^を釋^きて、指^さて、信^ゆて、呵^な空^を笑^ひせ、然^るべ^く、德^用堅^か洞^へ今^あ言^を
且^す奮^はて、且^す怒^はて、其^が氣^が、其^の身^の大傷^頑、彼^の罪^を、眼^を擊^つて、
齒^を切り^く、原^{もと}來^ら也[。]心^を覗^く事^を、憚^はる事^を、貽^はる事^を、遇^はる事^を
共^に作^はよ[。]身^と起^まる事^を、紀^二六^二年[、]脚^を歩^かせ^ん、甲^乙一^年、^は蹴^け仆^せせ^ん、^は嗟^むと[。]

兵もうち笑ひて何や物未だ見へた。出家は毎月女人のまゝ接客
とゆふが五百生の士兵同じる者多生ると説れ。極と傳り以てある。解
個の西僧は聚虎の類稀有恩顧の檀那小娘子と申傳て這頭を遠くから奉
き葉教へ來せん特と其夜の中は那虎は其半體傷化て生む事無
え。脚の名者と申り自ハ神明供能の眞西國を人不知れ並て世にハテ和
尚の號をとる。前二犯二六を腰を吊る草鞋を食ぬて敗北敗走
を乞ひて身を鎧を合ひて身を負ひて西側の親兵とも對ひて金が一隻時月
元。其夜は宿すハ左あれられ出没不測の聚虎中止すと大歎へ
諸木の枯枝りん通宵燐明を重々油灯を手に持てて不眠長夜
頭す。开を取るを爲すかう。唯氣と和風を山路の下に聚雲東と不眠起云
不穏。然へば大集火を奉り候と蹤を放くも。此等可りべしにあ。認命兩頭。

あひ日大は親兵衛へ金す起兵と別れ。ちよと馬の脚檻を早めに腰宿
所へかへま。達牒ありて兩個の吉伴を分ひて逐つてまぬく却宿所の聚石
賞より御名馬走候と啓示す。這馬は箇様と恩賜のうをせらる。の
宜く勅の文と書旨裏附をもろと取締毎は方略に取締每は方略に取
度を有りて聚石入を詰と銅をも程より親兵衛の様より毎是厚生席と
用兩口善き官をつけて回談すま。聚石折もも掌を昌る。親兵衛の牛白河
山より聚石と虎標ととて事の趣をすねて早速つてまほは花火。親の前道印
個の官は對して舊の官領の懇意をすゆ由り那虎廢治の事す旨
甚しき事と申す。方略に取締毎は方略に取締毎は方略に取
虎標をと前鋒況ふせし事の趣をすねて早速つてまほは花火。親の前道印
知りゆき。善き官を申す。方略に取締毎は方略に取締毎は方略に取
知りゆき。善き官を申す。方略に取締毎は方略に取締毎は方略に取

獨獵ハ身軍齋山東西三日行を要す。只良弓一張と獵局付二條。足供はとまの食は豆餅一盒と乾飯一盒子と准備して出る。前より射せり。十二條の内中十條の箭は皆其鍔を抜き。代々ノササ格闘の事。矢を引たれど失し。うの角らを射と見る。その矢を獲て之の事。又官吏の如きは連々退る。約莫一時許ナセ兩個の官復奉を親王。御人等が身見送り。指さり登時親兵衛の如きを陳す。先其らを合意。又其箭を見る。果て獨箭三條に。其他の箭は見送り。接去處。木丸。又其箭を見る。是良工の如き成なり。希とぞ。齊とぞ。稱ひ。又謝。官吏等は以て東西既よ取立ひ。されば這暖曾よ身跡を失ふ。邪山に伐れ。

か。遠回の虎。獨の我。得て不定。猶不矢。虎。峰山。下。日。る。又那虎。は。傳。と。も。力。星。と。更。命。を。頼。え。ん。ひ。く。各。位。と。高。て。一。條。月。屬。官。領。家。の。恩。賜。の。衣。裳。器。調。度。ハ。其。利。多。の。目。錄。を。始。う。と。各。位。と。虎。せ。か。せ。れ。今。あ。る。わ。ん。我。命。運。を。思。量。れ。今。や。用。房。す。因。て。返。一。名。を。與。め。あ。ら。が。へ。も。君。名。威。勢。ハ。五。歲。及。そ。出。沒。不。測。変。紀。と。も。金。槍。所。古。一。虎。を。捕。今。有。對。將。は。大。功。あ。ん。前。の。相。は。新。増。安。す。一。齋。一。の。人。於。今。年。壽。の。常。ま。と。云。故。御。へ。節。錦。す。と。詠。え。て。く。慰。然。が。親。只。衛。頭。を。主。將。で。否。と。よ。大。事。ひ。を。對。治。の。功。頤。ふ。恩。賞。更。身。暇。を。あ。り。と。安。房。へ。還。る。左。矢。東。ゆ。あ。る。銅。千。金。萬。石。の。御。と。と。御。の。あ。そ。そ。そ。朝。明日。而。汗。の。一。歲。を。下。た。と。即。ち。東。山。と。宝。庫。へ。還。る。勿。無。い。不。今。ハ。も。せ。か。ぐ。

。たゞ、敵ハ西サるを、急ぐ。ト、ひれ、一、巻、左、右、強引、古事。命、火、レ、町。
鎧、又、氣、ぬ、ひ、の、と、て、歸、て、日、暮、り、よ、け、。但、而、親、兵、獨、隸、業、作、内、み、信、
活、金、又、起、々、往、陽、落、し、黒、先、て、未、燒、。兩、個、の、若、宣、發、前、て、夕、鎧、を、互、
下、守、未、る、と、す、毎、う、ん、歎、を、贈、。且、中、酒、の、れ、ゆ、掌、官、等、又、ゆ、ま、え、不、を、齋、
め、を、そ、既、内、マ、便、良、無、果、か、。親、兵、和、ひ、歎、ひ、舒、且、舉、多、年、服、を、聲、
皆、是、安、身、も、う、も、ま、た、不、幸、來、よ、く、取、京、様、の、新、た、を、用、ひ、。肌、膚、ぬ、南、畫、繁、
鎧、被、之、被、下、一、同、一、生、鎧、の、細、興、財、甲、名、鎧、打、ま、廢、衣、の、初、向、あ、三、鎧、
彼、う、上、み、終、小、幕、の、小、袖、水、色、圓、袖、の、腰、脣、小、袖、を、下、鎧、表、ア、標、號、迎、エ、君、
軍、あ、野、袖、二、下、袖、一、穿、被、し、ウ、將、神、接、與、の、短、刀、と、小、月、形、の大、刀、手、口、
所、立、候、て、左、袖、を、膝、裏、卷、先、片、襷、腰、を、武、キ、ハ、射、る、時、の、便、宜、上、一、背、共、無、
鎧、又、陣、主、十、百、二、條、の、箭、箭、竹、高、又、騎、使、頭、四、翼、の、真、研、騎、射、笠、

門子よ木聞と虎謀士をもててはるを駒馬坐すと馬あづ

軍使と黒糸僕使の親兵衛が日雇に付けて好意深くとてゆるを有す

別離ぬき。三十萬の敵を連て人集まへ鎧を立へて易く今身四年で那星共處。

事はあんとつと取難いもかとてと相詰ら且たてと見背景のことを

退ひ難く悶然とう。余程の大江親兵衛ハ馬を找る。自河山を走

り程の十町足らずを日已ニ没黑の黑白の別改鳥度虎を懐在す

に之れの夷王の車十五乘を照とよび。唐山下和が夷玉より優れに去向哉許す。

山脚よまく馬の足櫛ふけりと馬を走る聲を白河の里を積み。又

事とや非や神の眞助か不知すか。内山の山路よりも取次が。延寶初更の比ひも右

に之れの夷王の車十五乘を照とよび。唐山下和が夷玉より優れに去向哉許す。

左側の路見て國の九折を嶺與て厭を冬の夜漸き深く。唐高に轍聲を

走る。馬の足櫛ふけりと馬を走る聲を白河の里を積み。又

事とや非や神の眞助か不知すか。内山の山路よりも取次が。延寶初更の比ひも右

に之れの夷王の車十五乘を照とよび。唐山下和が夷玉より優れに去向哉許す。

山脚よまく馬の足櫛ふけりと馬を走る聲を白河の里を積み。又

事とや非や神の眞助か不知すか。内山の山路よりも取次が。延寶初更の比ひも右

但畫圖

未
見

耶其力を退して更に便宜を取る者とを熟考すやうに尋ねたる親兵衛が答へ
て曰く「上剣も勿論と或る事で、人馬の進足を妙に。其便りを云々」
桂生は近づき其頭より老る赤松の周延十圍又餘をあらへて曰く
「體て皆を高く一頭を伏し、又其便宜を存り程より親兵衛へ相距と既り。二前足
を馬に騎坐する如き前刻よりあても、虎の隕地所とおどり走鬼と云ふ
處を能まず。固く、彈弓射る。豪傑の弓勢矢焉錯ひを丸の際を付うべし。
鎧わきを赤松の躰へ四五矢射入りて石虎の一聲高く鳴り、其箭を拔し。尋ねるを
対兵が途を二の箭を發して又は其右の眼を樹幹に遁て走るなり。其左の
眼も射れて其箭所立地を覗て才よ其尾を動かし。親兵衛の是を見るを
とて立ちて立て身を近づけ、右の拳を握り。つゝ虎の眉間に三打破。左の唐突に
唇を効力發揮せば、汗を出す。乃の一人の腰を立てて脇骨碎し成原へ走り去る。

卷之三



卷十九
金毛

一月五日



卷十九

次年正月五日

金毛

第百四十七門 紀二十一
親兵御前將軍 湖上十三國北之戰

紀元下
親兵被湖上之風破亡

宜時大江親兵衛の處を禪と見て短刀ヲ揮ふ刀子モ抜半合ひ直
虎の生え耳と石をまく腰す。草と交ふ力子を轟は挿入れて右て後方を立
よ。馬走帆のまゝ弓矢を放つ。左の廻は在りて今矢をかげ手に突きを打
マニヤ。這馬進退駭足を失ひ我宣鞭く蹴る。や。宣裏玉翁老侯の號
吉月海波の優也。劣らまへ今宵の柳。室の功を分つて足を賞むべし。
と稱みて聴て其邊邊も。恭下る駕す。時月を留メ四下を観る。ハ
山う。天然石ゆれば是金元観と抜起。馬邊邊へ推居て草下る。玄義
豆草。い。見事。い。見る。馬の轟。且庄柄松の石濱を汲て水を喫す
ゆ。我主。別石子虎と相も姑且總ひ居る程。じ。よき。同。うち。無事
ゆ。我主。別石子虎と相も姑且總ひ居る程。じ。よき。同。うち。無事

卷之二
トテ近ニ見タリ。を親兵徳心より訝り。も後ひて在リ。よ既に。まく。之處。
其火事。猶もそれ。是則一個の人左近。鎧を着。持へ方。手。久を振。腰を。身。
紀二年。宵。走。親兵徳早。聲を被。开。直塚。を。向。答。未だ。未だ。云。
聲。も。走。走。親兵徳。を見て。合。笑。な。大。志。も。那。是。
庶。が。と。何。へ。親兵徳。否。別。云。を。後。工。を。解。示。ま。往。山路。夜。狩。て。
和。即。又。一。個。未。出。故。あ。め。ら。ア。未。出。と。同。被。れ。で。熱。シ。山。鷹。の。燒。雪。度。、御。道。を。
知。音。ゆ。ぬ。も。高。巴。と。之。元。か。う。あり。み。故。の。箇。様。と。之。折。代。四。郎。と。音。に。云。
伴。毛。赤。血。放。業。あ。此。役。本。の。方。へ。と。サ。一。遣。一。代。四。郎。と。紀。一。と。親。兵。徳。心。主。の。先。
途。主。達。よ。主。近。山。路。よ。主。か。る。又。櫛。駒。駿。駿。の。ア。ス。雪。次。距。車。上。其。元。と。敷。い。
走。ア。ス。駒。駿。駿。一。合。と。主。五。虎。の。駒。者。ア。リ。首。尾。其。元。と。敷。い。
ひ。走。雪。リ。へ。前。ト。且。を。既。ア。ス。ア。ス。と。そ。駒。兵。心。と。終。て。

卷

もも
空氣。身も心も。トテハ那徳用。前。結界。樹下。奉事矣。も
陳。其れを。トテハ那徳用。前。結界。樹下。奉事矣。も
個の黒兵。者。守らる。猶五那。五虎。威儀。也。是く和君。すらま。安
單。其れを。見ゆ。も亦復。立。禁。けよ。章。ひあく。今。立。やく。逢。まろ。一
え。それ。那兩個の。惡僧。ハ天四。像。の如。み。れ。後易。は似。れ。と。尚五虎
眼。あ。り。小。心。ア。腰。られ。と。口。を。罵。矣。猶。新
計。ひ。今。實。の。進。退。極。て。好。! 那徳用。也。か。研。虛。る。我。は。難。言。極。く。義
とも。我。ハ。那。奴。ち。を。撃。ま。欲。せ。そ。那。奴。行。反。く。自。滅。を。取。り。し。れ。寔。は。天。誅。と
之。ひ。之。ノ。那。又。五。虎。の。虛。名。を。高。う。せ。正。苦。真。醫。經。緯。行。づ。相。處。事。も。
計。る。と。あ。相。る。足。者。有。る。も。先。他。を。見。よ。か。ど。の。と。之。巡。前。面。あ。る。樹。下。ふ。諸。生
徒。不。可。詰。り。又。薦。文。を。振。照。し。て。其。横。下。立。寄。く。と。て。い。那。暴。虎。
金毛。白鶴。世。ある。画。圖。の。龍。也。ユ。御。重。世。の。猛。獸。在。前。眼。と。耳。

君

卷之三

草へ出でて、それで尋ねて有り思ひ六を先見る。腹を洗ふ。年暮れ。是の日
とどき。我慢をもてて歩く。遂に駅へ。天遙つて。左あがま。右三得と。物觀く。且
おとと大きくなる。舊知は。かくまく。躍る。恭と。親兵衛。まもむ。黒
智慶の神箭。射て落す。都虎。さうむ。其弓の弓体。落す。馬も。荷降ろす。
示しゆひと。向へ。親兵衛。然れどよ。我も亦。遠山路を。甲斐より。那須と。見。馬
アリ。上虎の在知を。知らう。ゆき。憶を。方程。走。地方を。世對。渋の。渡
り。走。思ひの隨み。弟へ。死す。併我武姫の。よく。致じ。可か。是。我
雨舎の。威福えぐ。且。祖神の。眞助。うご。転。う。て。う。も。や。黒。い。そ。を。走
不。う。う。と。名けられ。政元主の。愛號。と。今。斬る。咱。の。名を。久。傳。ば。罪。を。馬。す。
そんと。名けられ。政元主の。愛號。と。今。斬る。咱。の。名を。久。傳。ば。罪。を。馬。す。
おとと。名を。久。傳。ば。罪。を。馬。す。
おとと。名を。久。傳。ば。罪。を。馬。す。

かづき。那虎の直虎。と云ふ。素戔巨命。金剛。筆にて。故。夏基。
瞳子。其無を。而。舊。重政。元主の生。國。見。や。其画。是。主。三。風。之。基虎の
目子。黒。セ。也。ナ。シ。又。區。虎。急。撃。之。使。恐。讒。を。ニ。シ。テ。獨。ヒ。京。家。の。出。下
タ。箭。鍛。破。其。甲。斐。之。房。ノ。功。ア。リ。ハ。ク。恩。ソ。故。ナ。ト。威。モ。バ。ア。ス。代
キ。張。を。射。ち。既。ナ。テ。那。虎。の。兩。眼。共。ノ。皆。此。深。く。射。矣。目。子。ヒ。東。ノ。立
地。ヒ。驚。れ。か。ル。驚。キ。寺。那。箭。を。授。ナ。忽。地。其。原。幅。ナ。ナ。入。ト。モ。ヘ。ト。思。タ
リ。箭。を。授。ナ。人。ヒ。見。ミ。復。ま。の。證。据。ナ。ア。ミ。欲。モ。の。ミ。使。而。ナ。再。思
ト。今。審。虎。宝。ヒ。遇。け。諸。人。那。翼。風。ヒ。や。ら。シ。を。首。ナ。成。ハ。行。客。山。寺。僧。石
灵。虎。寺。靈。虎。ハ。唯。其。人。ヒ。蘇。レ。ニ。余。ち。ノ。那。虎。威。ヒ。見。リ。敵。退。く
氣。色。ヒ。六。官。ヒ。駆。ト。ノ。言。セ。ン。ト。お。ホ。ー。の。錢。リ。亦。テ。ハ。る。新。成。生。年。33

筋

筋

よ山幸あれ
虎も當時。

思。知。外。ハ。而。不。可。言。所。尚。カ。欲。是。モ。亦。我。燒。モ。思。ヒ。ト。憚。ミ。神。明
併。附。自。然。有。方。便。重。虎。モ。猛。威。振。ハ。セ。我。モ。射。ミ。事。カ。少。故。御。
返。モ。之。ノ。事。ヒ。と。憎。ハ。難。ナ。モ。我。始。モ。信。モ。少。思。ヒ。難。ナ。モ。難。ナ。
備。の。獵。箭。ヒ。一。條。の。ミ。其。鱗。の。十。條。鍛。を。要。來。ト。是。モ。木。丸。モ。一。条。ナ。追。リ
意。モ。推。モ。見。我。矢。局。届。カ。二。箭。ノ。前。ナ。足。高。シ。
射。皆。モ。豈。エ。弓。甲。斐。名。ヒ。ミ。見。倘。ナ。時。運。ハ。福。二。箭。ナ。足。高。シ。
木。丸。モ。木。ゼ。モ。豫。ヒ。主。張。布。德。用。正。吉。真。賢。直。道。景。紀。印。ハ。那。良。武
義。モ。未。熟。モ。思。ヒ。然。モ。大。ナ。モ。余。レ。シ。我。今。宵。山。獵。モ。ア。ハ。モ。
思。モ。矢。局。モ。射。ヒ。と。豫。深。念。モ。あ。ハ。又。追。十。條。鍛。モ。援。去。ハ。今。
僧。塔。ハ。皆。政。ニ。主。の。因。ヒ。傳。者。ハ。一。人。ナ。多。力。リ。而。其。事。ヒ。多。之。の。事。モ。そ。く。
君。

衆

後は高麗に元康記と在り。余の前は高麗精化二年也。是の事は
表と示して神事を今興へ。甲斐又トノ宵群。小祖。
対を救ひ。我等よりと増て多き。今より神事。すれども
を凍焉。老々及びて神速く亦可らむ。と解説せ。紀二十六命感應と
ハ。衆事皆羅神の影。立鏡。腰。隈。耳。せのむ。ツノ。鬚。
王も又て安。如意あり。ばづくも威もあり。其數きく不可。ま。和下
解よ立奏。モ祈也。那冥助。ゆき。ま。と。と。う。う。教。い。腰。ま。シ。は。當
下親兵衛。起。馬の傍。五つ程。紀玉。處。解。ア。腰。を。令。る。
又。ひ。持。モ。親。兵。衛。の。筋。を。口。口。衛。て。馬。の。内。り。と。も。筋。の。又。先。一。人。
表。皮。で。直。塚。和。扇。加。勢。且。古。居。虎。雪。典。す。我。昌。不。久。也。根。付。
修。木。か。と。り。ふ。紀。二。六。を。も。其。表。か。あ。う。ひ。首。義。刀。主。是。ニ。是。二。年。

是日後より山子の命。鎧の如き持て。猶も其身の荷りよこす。此がトハ
アシテの草實である。日本魂。唐崎の夙路を授て。徐々と馬の足捨て
リ。徒而大江親兵衛の兜二つ相引れて。湖水の方へ赴く。談講谷今俗詩作
南竜山より届る。提携あり。と豫聞す。私徑やく。且其山路の嶺山馬鹿と
渡りて。あんと思へ。詎意遠れを數多。鞍伏大駱山里をうち過。
中よりまた程又天外將。明んとも。俗云。山中難易。是山難の所
新風あり。是を辛崎の風と唱へ。ひうちま。南辛崎るを。愈す。もの金限本入津
事。新風久す。其用遠て。三三園。のと。相接て。相共。繩。車
常を。車と。を親兵衛。又。風を。東海道。津の外。其城の守護
す。の。風。車。新風を。見。風を。と。も。が。風を。見。風を。見。風を。

卷之三

卷之三

獸の免る。是れを以てした是の大軍をやつが伴説よりの爲。報る。傳聞
してあつてもとほ初の一人。されど。と云ふ。恨は難談して胡言時をも良し。は余程
大親兵衛へ傳。伎俩を知りゆかる。其を徐使ひかす。又。多賀一時
已隣近く。りり。心連ひよ。馬の躁く。刃を嘆び催促す。よし。心々とぞ。や。許
へ。もかず。心情弛ゆ。疑ひ。又。馬に立ち。耳を傾け。鼻と鬚。裏
形勢を覗す。馬は。鬍指く。鑑す。而。鰐の吊眼の音。下へ。が。廢棄那裡。口宣
わ。我と捕ん。寒うる。身と。身も。築。下へ。又。渠を。洋を。詳。高。正
ら。跡。前を。令。そ。そ。核。と。身構を。做。そ。程。も。身。内。寛。正。と。鰐。敵の
音。四。萬。へ。戸を。覗。と。啓。く。そ。そ。奈。本。國。の。頑。人。老。松。潤。大。丈。准。一。鳥。草。誠。の。身
甲。み。段。と。神。の。戰。袍。へ。と。擧。將。と。兩。刀。を。詭。づ。地。犯。馬。の。珠。金。指。と。よ。ど。も。
わ。ま。か。を。持。旗。走。轟。せ。衆。兵。一。百。二。三。十。

四下、响く聲。す。され大江親せ置
虎の窟穴を捕ま。那屋玄相候る山貓あす。名とあひ。意を加爾。詳候す。
罠を亂くうち逃げ。逃げて安堵へ還る。と欲よ。寝ひそ。余より上を恥じる。
元を答が。也。也。も。矣。未今爾を捕。捕。京師へ献。之。と。日本
本津の極爾へ。也。既。ユ。の。矣。を通達され。身を隣。隣。は。微。毛。無。ま
す。す。せ。而。一。步。も。脱。き。路。ハ。キ。つ。ひ。の。キ。セ。ソ。急。ぐ。速。下。馬。も。素。シ。被。く。ど。ヤ。と。ソ。ル。也。是
を親兵衛の嚴然と。す。か。驚。ひ。思。勘。ん。唯。一。挺。と。肩。若。新。虎。の。直。古。ヒ。ア。ビ。ト。素
れ。思。ま。ス。ま。ま。ら。思。ら。ま。こ。は。是。名。画。の。変。化。れ。れ。酒。家。よ。眼。を。射。れ。も。原。故。の。画。幅。は。復。り。一。射。こ。ま。ひ。も。
却。ね。と。も。那。屋。あ。ハ。雷。道。よ。ち。坂。洋。音。田。紀。二。六。か。非。如。紀。二。六。も。立。ま。り。そ。那。里。子。注
定。を。き。み。も。我。射。入。ま。櫛。前。二。條。ハ。レ。那。樹。よ。射。づ。な。ふ。开。く。も。紫。し。も。射
手。は。之。が。先。と。こ。う。民。お。つ。い。う。良。更。比。シ。清。之。が。同。ハ。ど。も。見。れ。是。櫛。の。味。向。ま。ん。我。是。甚。磨。ど。や。我。本。性。信



是子が立と引返し。船内に親兵衛を捕まえ、馬を飛騨江原へ走らし、左士と討麻根を活かし死をも拒む折角地。度重なる火高の機升り。湖水の風は靡く煙。這方へ冲りて。鶴宗と瞻御。原来裏の者あり。太を放さる。知毎半食い事か。殺滅止も留め。兩隊の馬を駆け、慌て切掉せざる者あり。敵の弓矢を振り盡す。限本の櫻井が大津を放さず走る。鶴宗と惟一の逃亡兵を誘引れる。敗れ一路に逃げ、うなぎの足をよみがへる。親兵衛の眼を奪はれ。那屋のまぐわと通ひ程の大津の頭と大枝。入道種物を亦隊兵一百有餘と殺す。かと惟一鶴宗と勤を争ひ馬を早々坐す。其甲斐なく逃る身方の一人辟かれて。柱に柱を只一國と稱れ謀坐。大津を抜て退走る。と親兵衛八敵を自ら立と見せし。難立と想ふ。大津の脇に立つ。父の畢竟大は親兵衛を國と破る。後語説甚麼。名前又下回し解分を聽ね。

南總里見八大傳第十九

卷之二十九終

天保九年庚午年十月二十四日

本文二十五頁稿子序目篇後半
育夏者十年己亥夏四月朔稿畢

著者作臺灣之集

筆
大吉利
福硯
雨

